

第Ⅲ章 総括

第 1 節 生目 9・33 号墳の墳形について

9 号墳、33 号墳の調査の結果、9 号墳を後円部、33 号墳を前方部とする前方後円墳である可能性が高まった。ここではその如何も含め検討をおこなうことにする。

前方後円墳であることを最も端的に証明するにはくびれ部を確認することである。しかし 9 号墳と 33 号墳の場合は、くびれ部に位置するところが切通しにより大きく削平されている。この削平は現地表から数 m に及び、検討する材料が失われている。また残存度合いが幾分良好である南側くびれ部に相当する位置の 9 G トレンチでは、後円部と前方部の接続部分に、古墳に後出する大型の別遺構が切りあっているため、検討材料が失われている。このようにくびれ部から 9 号墳と 33 号墳が前方後円墳であるという証明は不可能であり、他の調査結果から傍証していく必要がある。

9 号墳は調査をおこなった範囲内では、周溝外縁の立ち上がりがすべて削平されており、周溝の有無も確定的ではない。このため 9 号墳の周溝の流れから、円墳か前方後円墳かの判断は不可能である。33 号墳では墳丘南側において、9 号墳に向け直線的に伸びる周溝を確認した。この周溝は西へ直線的に伸びるが、屈曲せず調査区内において収束する。この直線的に伸びる且つ屈曲しないという点から、33 号墳は円墳や方墳ではなく、前方部隅角で周溝が収束する「九州南部型前方後円墳」（橋本 2013）の前方部となる可能性が高い。そこで 33 号墳南側周溝を、9 号墳を後円部とする前方後円墳の前方部側面の周溝と仮定し、9 号墳の中軸線を延長した線で反転してみると 33 号墳の北側で検出された周溝と思われる遺構よりも更に北側に墳丘端が位置する。前章第 4 節の墳丘横断面の項でも、北側斜面は削平を受けており本来の墳丘形態ではない可能性を述べたが、この点からも北側斜面は削平を受けている可能性が指摘できる。削平を受けていると捉えた場合、33 A トレンチの土層断面図 12 層の取り扱いが問題となる。12 層は墳丘盛土上から周溝とされた遺構を一括で覆う層となっている。自然堆積層の基本層序 IV 層に類似するが、遺構部分の埋土のみが弥生時代後期の遺物を多量に含むことから、遺構部分と斜面の埋土は別のものであり、遺構部分は古墳築造以前の遺構である可能性がある。

これらの点を踏まえ、9 号墳を後円部、33 号墳を前方部とする前方後円墳を復元したのが第 33 図である。復元に際しては、沼澤豊氏の 24 等分値企画法（沼澤 2005）を参考にした。後円部は 9 A、9 Z トレンチと 9 G 調査区の調査成果から径 38m に復元されている。前方部に関しては 33 号墳南側周溝が収束する位置から復元をおこない、墳長 60m、前方部長 22m、前方部幅 25m の値が得られた。前方部長が後円部径の 6 割程度の短小な前方部を有する前方後円墳である。この復元案を、生目古墳群内の他の前方後円墳と比較すると、近似値を示すものが、生目古墳群中最小の前方後円墳である生目 21 号墳である。21 号墳は概要報告書の中で墳丘復元をおこなっているが、墳丘端の位置が周溝内の立ち上がりの位置ではないとの指摘を受けており（生目古墳群シンポジウム 2014 内での柳沢一男氏の発言）、本来の墳丘は概要報告書の復元より一回り大きくなる。詳細な復元に関しては、21 号墳の報告書に委ねたいが、柳沢氏の指摘を基に復元をおこなうと、墳長 42m、後円部径 28m 値が得られる。後円部を 1 とした場合の前方部の比率は、9・33 号墳が 0.55、21 号墳が 0.5 となる。両者は発掘調査の成果から、葺石をもたない点、周溝が前方部前面に向かって浅くなり、隅角付近

で収束する可能性が高い点も共通している。

また 9 号墳の大きな特徴として低平な墳丘が挙げられる。発掘調査の結果、墳丘面の直上に Th-S を含む黒色土が堆積していることから、これは築造当初のものではなく、古代から中世の初め頃にかけて 9 号墳が大きく改変されたことを示している。また 33 号墳も、墳丘面の直上層は客土であり、本来の墳丘高は明らかではなく、墳丘の立面形に関しては復元することができない。

以上のように、9 号墳、33 号墳は前方後円墳である可能性が極めて高い。その墳形は前方部形状が若干異なるものの、21 号墳に類似する短小な前方部をもつものと思われる。立面形に関しては後世の改変により明らかにすることができなかった。

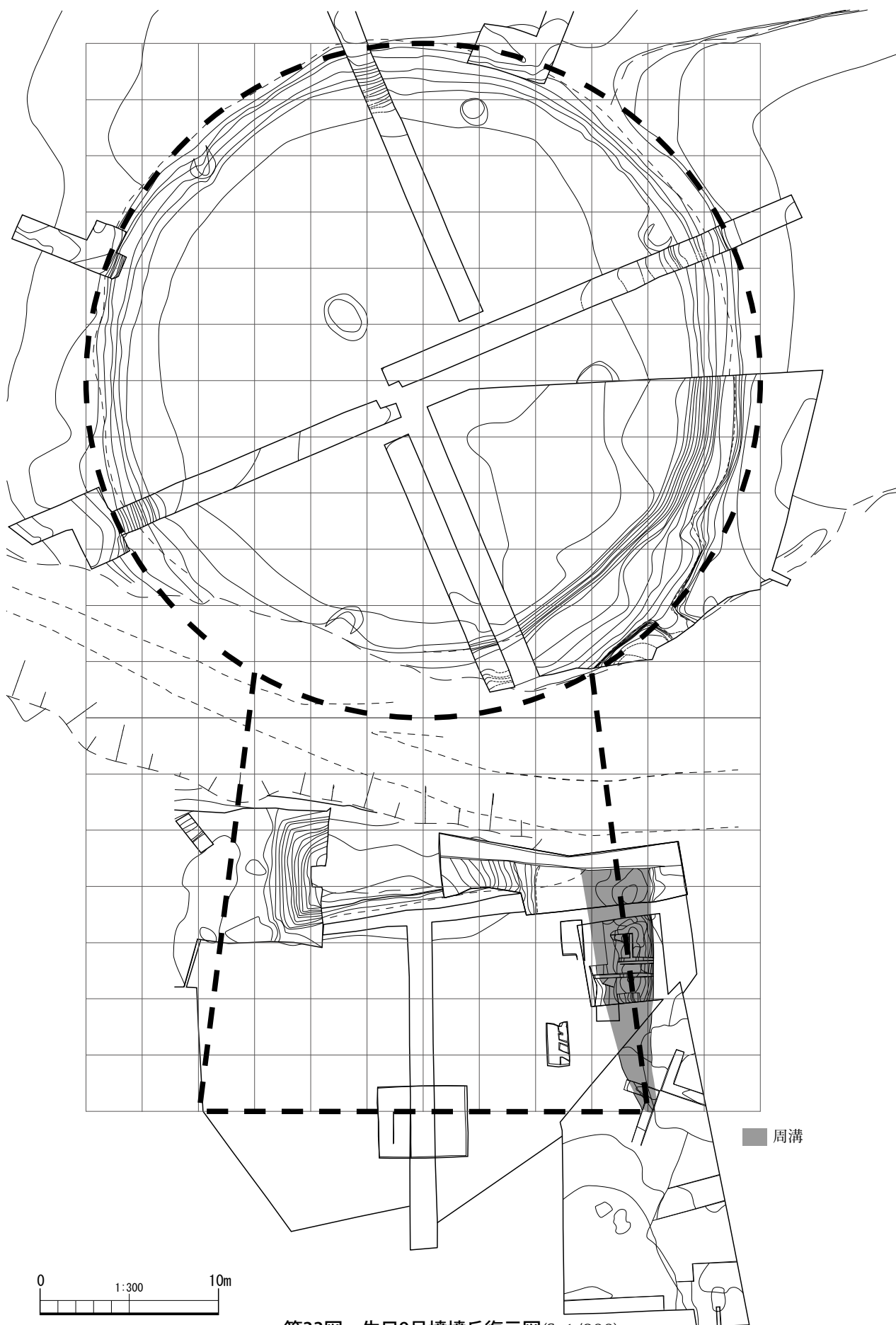
第 2 節 生目 9 号墳周辺の地下式横穴墓について

生目 9 号墳の周辺では、33 号墳周溝内のものも含め 5 基の地下式横穴墓が確認されている。その中で玄室まで調査をおこなったものは、『史跡生目古墳群周辺遺跡』で報告されている、7 号、8 号地下式横穴墓のみである。9 A トレンチで確認された 51 号地下式横穴墓、33 B トレンチで確認された 52 号地下式横穴墓は竪坑検出、33 D トレンチで確認された 53 号地下式横穴墓は竪坑の一部をサブトレンチによって調査をおこなっている。構築位置は、7 号・8 号地下式横穴墓ともに復元した 9 号墳の墳丘端から約 5m の位置にあり 9 号墳を意識した構築位置といえる。両者ともに 9 号墳の周溝外縁が確認されていないため、周溝内か周溝外か明らかなでないが、周溝内に構築された地下式横穴墓は、基本的に玄室を設ける際に墳丘もしくは周溝外縁の立ち上がりを利用することから、各々の構築位置と玄室方向から鑑みると、周溝外に構築されていると思われる。玄室方向は 7 号地下式横穴墓が 9 号墳の墳端付近に玄室を向け、8 号地下式横穴墓は 9 号墳の墳丘方向へ玄室を向ける。このため、周溝内の場合、墳丘内に玄室を設ける形となるが、前述のとおり確認された墳端から距離があり、墳丘立ち上がりを利用したものとは考え難いためである。51 号地下式横穴墓は、9 号墳墳端部に竪坑を設け、墳丘内に玄室を構築する。玄室規模は不明であるが、竪坑の規模から大型の地下式横穴墓の可能性は低い。52 号、53 号地下式横穴墓は、両者ともに周溝内に竪坑を設け、周溝外縁に玄室を設ける。構築時期が明らかになっているものは、玄室内まで調査をおこなった 7 号、8 号地下式横穴墓である。各々出土した鉄器から 7 号地下式横穴墓は古墳時代中期中葉に、8 号地下式横穴墓は須恵器 TK73 ～ 216 併行に位置付けられている。時期が明らかになった地下式横穴墓は、両者ともに、現段階で宮崎平野部最古の 5 世紀前葉に位置付けられている生目 43 号地下式横穴墓が構築されてから大きく時間を経ていない比較的古い段階に位置付けられる。

第 3 節 生目 9 号墳・11 号墳・12 号墳の時間的位置付けについて

ここでは今回調査をおこなった古墳の時間的位置付けについて検討したいが、33 号墳は、9 号墳の前方部である可能性が高いため、33 号墳を 9 号墳にまとめ、9 号墳（ここからの記述では 33 号墳を含む）、11 号墳、12 号墳の 3 基について検討する。なお、時期が確定的な 12 号墳から順に記述する。

前述のとおり、今回の調査で出土遺物から時間的位置付けが可能な古墳は 12 号墳のみである。12 号墳は、周溝内から出土した須恵器から、須恵器 TG232 ～ TK73 併行、古墳時代中期初頭～前



第33図 生目9号墳墳丘復元図(S=1/300)

葉に位置付けられる。生目古墳群内においては、生目 5 号墳がほぼ併行する時期に築造されている。5 号墳と 12 号墳はともに丘陵北群に位置し、5 号墳は墳長 57m の前方後円墳、12 号墳は直径 20m の円墳であることから、北群内においても階層構造が見られることが明らかになった。

11 号墳は、12 号墳の周溝が 11 号墳を避けるように築造されていることから、12 号墳に先行して存在していたと考えられる。ただし、生目古墳群周辺遺跡 11 - 1 トレンチで出土した須恵器が 11 号墳に帰属する場合は、11 号墳が 12 号墳の直後に位置付けられる。隣接する位置に存在する円墳であることから、12 号墳に近接する時期で先行もしくは後出する可能性が高いが、確証を得る手立てはない。

9 号墳は、その規模や周辺の円墳群の中で最高所に位置することから、周辺の円墳に先行する可能性が高い。前述のように 12 号墳が中期初頭に遡るため、9 号墳は前期に位置付けられる。また、9 号墳は 21 号墳に似た短小な前方部を持ち、21 号墳と同様に葺石をもたないことから、21 号墳に近接する時期の可能性もある。宮崎県内における古相段階の前方後円墳をみると、西都原 81 号（4 世紀初頭）、生目 21 号（4 世紀前葉）といずれも短小な前方部を有し葺石をもたない。これらの点から生目 9 号墳も同時期に位置付けられる可能性が高いが、墳形や葺石の有無のみで時期を判断することには慎重でありたい。

これら 3 基を生目古墳群の主要古墳の変遷に当てはめたものが第 34 図である。柳沢氏の指摘のとおり、北群、南群でそれぞれほぼ併行する時期に前方後円墳が築造された可能性があり（生目古墳群シンポジウム 2014 内での柳沢氏の発言）、埴輪の有無に関してもあり方が異なる。また前述のように各群内においても階層構造がみられることから、2 つの集団が生目古墳群を墓域としていたと捉えられる。

【第Ⅱ章・第Ⅲ章主要引用・参考文献】

- 青木 敬 2003 「墳丘構築法の再検討」『古墳築造の研究』－墳丘からみた古墳の地域性－、六一書房。
- 橋本達也 2012 「3 地域の展開 ①九州南部」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学 2、同成社。
- 沼澤 豊 2005 「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）」『考古学雑誌』第 89 巻第 2 号、日本考古学会。
- 宮崎市教育委員会 1996 『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 28 集。
- 宮崎市教育委員会 2011 『史跡生目古墳群 保存整備事業発掘調査概要報告書Ⅷ』－生目 21 号墳の調査－、宮崎市文化財調査報告書第 85 集。



は時期比定の根拠が弱いもの

第34図 生目古墳群主要古墳変遷図